

7

文政7年(1824)佐賀における麻酔手術

—華岡門人 井上友庵の事例—

青木 歳幸

佐賀大学地域学歴史文化研究センター

草場珮川(1788~1867)という佐賀藩家臣多久氏儒者の日記に華岡青洲門人井上友庵の麻酔手術の記録がある。珮川は、古賀精里に学び、文化8年(1811)には、精里に随伴し、対馬に赴き、朝鮮通信使を応接し、のち佐賀藩藩校弘道館の儒者となるほどの儒学者だった。著述に『珮川日記』のほか、『津島日記』(文化8)、『珮川詩鈔』(嘉永6)などがある。

『草場珮川日記』は、三好不二雄監修・三好嘉子校注により、上巻が文化元年(1804)~文政5年(1822)、下巻が安政4年(1857)までの日記として刊行された。

この日記の文政7年(1824)記事に、珮川妻の実家西家の五男在三郎娉叔(かしゅく)への華岡青洲門人、蓮池藩医井上友庵の麻酔外科手術が記録されていた。その記事は以下の通りである。

「文政七年(1824)五月十七日 為 娉 叔 訪井上友庵、謀其医瘤事、時友庵有疾」

「文政七年閏八月五日、娉 叔為医瘤、相隨到我舎」

「八月九日 娉 叔在江原平治兵家、請井上友庵治瘤、友庵先遣弟徒、与麻沸湯、及夜、友庵至時、眊(べん、両目がふさがる)眩已甚、瞳子散乱、摘肌不覚、乃剖而療之。

十日 使娉叔弟季命(泰助、後沢井)、走告安二親、娉叔至未牌(みはい、未の刻、午後二時から四時)、薬氣始醒、臆語(せんご、うわごと)乃止、問其痛否、答曰、曾不知医之来、豈覚其痛楚(つうそ、痛み苦しみ)邪、

十二日 又共往謝友庵」

珮川の甥在三郎娉叔にはいつの頃からか医瘤ができていた。珮川は、帰郷した華岡門人友庵の麻酔手術の噂を聞いていたのだろう。娉叔のために、井上友庵の家まで訪ねて行、娉叔の診察を乞うた。ちょうどその時は、友庵も病氣だった。が、準備が整い、文政7年閏8月5日に娉叔は瘤の治療のために珮川の家にやってきた。8月9日に、娉叔は江原平治兵家で、井上友庵の手術をうけることになった。友庵はまず弟子を派遣して、麻沸湯を与えた。夜になって、友庵がやってきたとき、娉叔の両目がふさがり瞳が散乱した状態で、肌をつねってもわからない状態だった。そこで、皮膚をさいて瘤をとって治療した。この西娉叔22歳のときの手術は見事成功した。

その1年後、娉叔は江戸昌平校に学び、学力を高め、著名な漢学者になった。約30年後に、諫早からの帰途雪の深い多良岳で遭難してなくなった。安政4年(1857)2月4日、55歳だった。

井上友庵の華岡青洲入門は、文化12年(1815)であった。

「文化十二乙亥十月廿七日 肥州蓮池家中 井上友庵 紀州伊都郡妻村 請人 北垣小三郎」(高橋克伸「華岡家所蔵「門人録」翻刻資料」国立歴史民俗博物館研究報告第116集「地域蘭学の総合的研究」513P)

帰郷時はいつか不明だが文政初年ごろだろう。井上友庵は、蓮池藩主に仕えて、切米21石を賜っていたが、後、紀州の華岡青洲の門下にはいり、免許を得て帰国した。兄仲民の死後その遺児仲乙がまだ幼かったので、甥を助けて佐賀で治療にあたった。文政7年3月、本藩鍋島齊直に召されて御側外科医となり、切米20石を拝領した。その年の8月、友庵は青洲に学んだ秘薬麻沸湯を使って草場珮川の甥西在三郎(娉 叔)の瘤を摘出手術したのだった。麻沸湯は麻酔薬で、佐賀での麻酔手術は、これが最初であった。おいしいことに、友庵は39歳で死去した(三好嘉子氏調査)ため、著名にはならなかった。

兄仲民の遺児仲乙も、天保2年10月9日に華岡家入門、仲乙の子、静軒もまた華岡外科に嘉永2年3月28日に入門した。

なお、佐賀藩医学校好生館の『医業免札姓名簿』をみると、嘉永6年12月19日に、外科、井上仲民、佐野孺仙(佐賀藩外科医)門人、30才がみえる。静軒が改名したのであろう。